ガラスについたキズ

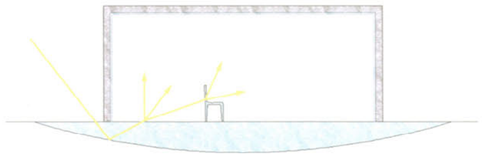
ガラスの美しさは、傷により失われると考えられてきた。一方、家において傷がつくことは、思い出など、そこで生活が行われてきたことを感じさせることから、空間のあたたかさに結びつく。そこで、ガラスに傷がつくほど、空間があたたかくなる家を提案する。

この家では、床と基礎、家具、柱、内部の壁面がガラスで出来ている。基礎となるガラスを家の輪郭よりも大きくすることで、外の光は床下で反射し、室内に足下から光が入ることになる。その際、光は床面についた傷で散乱し、やわらかい光になる。室内の家具、柱を透過するときに再び光は散乱し、やわらかくなる。

ガラスに傷がつくほど室内の光はやわらかくなることから、生活で出来た傷とともに、家のもつ空間はあたたかくなっていく。この家において、ガラスに傷がはいることは良くないという価値観はうすれ、ガラスに傷がつくほど魅力は増す。

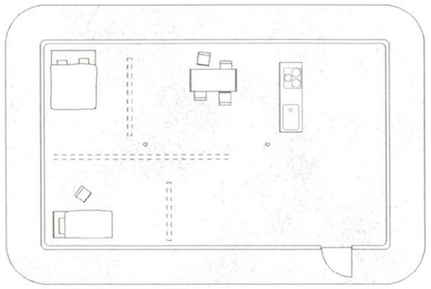
〈ダイヤグラム〉

・光が透過する際に、ガラス面で散乱



・暮らすほど傷がつき、光が変化

〈平面図〉



可動の間仕切り壁によるフレキシブルな平面計画とすることで、ライフスタイルの変化とともに傷のつき方が変わり、空間の質がうつりかわる。

〈傷の種類〉

擦れることによる傷
→光が散乱する

割れることによる傷
→傷のところだけ光る

家具との接触による傷
→生活の痕跡がうかぶ

へこみによる傷
→模様の様にうかぶ